

* 測地学委員会の三鷹国際報時所備品監守簿発見

皆さんの中にも写真1の門柱をご覧になった方も多いことと思う。文字通り三鷹国際報時所の門柱である。ここにあった三鷹国際報時所は昭和23年7月10日に東京天文台に移管された。それまでは文部省測地学委員会というところの所管であった。東京天文台に移管されたのは当然ながらこの門柱だけではない。この門柱の中には平屋建ての建物が何棟も建っており、中桐の知る限りでも天文台工作工場はこの中にあった。そして天文時部経度課(多分報時課も)がこの中にあった。昭和41年に北研究棟が建設され、天文時関係の方々も北研究棟に移られ、国際報時所跡は昭和49年頃まで日本天文学会事務所として使われていた。



写真 1

この門柱の文字について書き留めておかねばならないことがある。それはこの揮毫者がかの寺田寅彦と言われていることだ。寺田寅彦は大陸移動説を当時既に信じており、大地の移動、伸縮の時間変化に興味を持ち、現在でも国立天文台に設置されている基線菱形を設置したと言われている。

さて、文部省の 学制百年史 第一編 近代教育制度の創始と拡充 第五章 学術・文化

第一節 概説 三 学術・文化の国際交流に次の文章がある。

学術研究がそれ自身、国際的な性格を有していることはいままでもない。したがって、わが国の科学が発達するにつれて、おのずから学術的な国際社会との関係が深まり、国際

的な連絡協力が進展していくのは当然である。そして、学問の性質上、国境を越えての研究が必須の天文学・地球物理学等の分野において、まずまず第一に国際協力が開始されたのも当然のことであった。

その端緒として、緯度観測事業と測地事業が着手された。すなわち、明治十九年、ベルリンで開かれた欧州経緯度測定会議において、万国測地学協会を拡大して未加盟国に加盟を呼びかけることになり、わが国にも通報され、これに応じて二十二年、わが国も同協会国際条約に加盟した。その後、万国測地学協会では、緯度変化の国際共同観測を行なうため二十七年、具体案を提出し、わが国もこれを応諾して、三十二年、万国測地学協会との条約に基づいて、北緯三十九度八分七秒の線上の世界の他の五か所とともに岩手県水沢に臨時緯度観測所が創設されるに至った。この国際的な緯度変化の観測事業は以来、戦時、戦後の混乱のうちにも中断することなく、今日に至るまで実に七〇有余年にわたって継続しているのである。なお、この間、明治三十五年、観測所長木村栄博士の歴史的な「Z項の発見」の発表があり、国際的に高い評価を受け、のちに大正十一年、水沢は国際共同緯度観測所の中央局に発展していくのである。

臨時緯度観測所の設置を機として、明治三十一年、測地学委員会が発足した。その官制によれば「測地学委員会ハ文部大臣ノ監督ニ属シ万国測地学協会ニ関スル事務ヲ掌理シ及測堆学ニ関スル事項ヲ攻究ス」とあり、委員会は、創立以来重力測定を全国的に行なうとともに、海外諸地域との比較観測とを結合し、また大正十三年、東京天文台構内に三鷹国際報時所を設けて国際無線報時の受信と時刻の国際共同研究事業に参加する等、単なる審議会ではなく、それ自身、国際的な地球物理学的研究業務の中心機関としての役割を果たした。

ということで、水沢の臨時緯度観測所の設置を機として、明治三十一年、測地学委員会が発足した。そして大正 13 年に東京天文台構内に三鷹国際報時所が設置されたのである。東京天文台構内にはこれらの施設として高さ 60m の空中線鉄塔 4 基があったが、昭和 18 年 8 月、軍用機が接触し、墜落する事故があり、昭和 20 年 4 月に撤去された。今回紹介しているものは、その三鷹国際報時所の備品監守簿が発見されたことである。

平成 20 年 6 月 18 日、東京天文台天文時部の末裔である「重力波」グループの事務支援員の方が、アーカイブ室が発足したというので、この古い書類の扱いに困っていたので収集品にならないかとお持ちになった。多分この方は、現在お勤めの部署が天文時の末裔であることもご存じないであろう。写真 2 がその古い帳簿である。

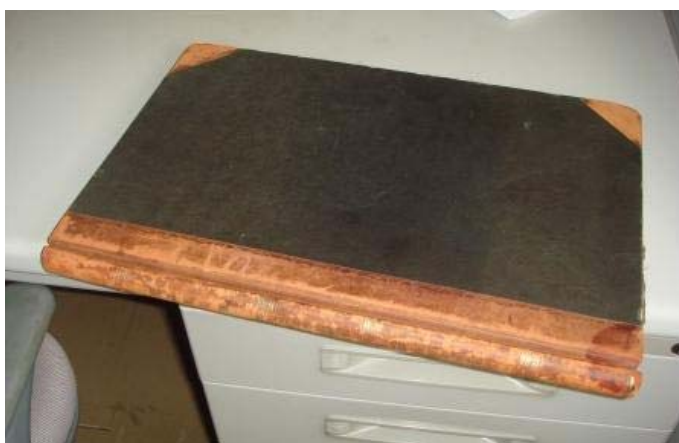


写真 2

これでは唯の古い帳簿である。背表紙の写真3、4をご覧いただきたい。



写真 3



写真 4

そして、その一ページをご覧いただきたい。大正12年から始まっている。

年月日	品目	数量	記号	
大正 12 10	10A-100A 携帯用 直流電流計 No. 413	一個	○	150.0 兵
大正 14 6	100 mA 全 直流電流計 No. 269	一個	○	110.0
昭和 3 年	10 mA 用 直流電流計 No. 413	一個	○	安
昭和 3 年	50 mA 直流電流計			
昭和 6 年	0-50 mA 直流電流計 No. 552	一個	○	65.00 日
昭和 12 年	15 Amp 用 直流電流計 No. 2376	一個	○	安
昭和 5 年	10 A 全 上 No. 2352	2	○	150.00
昭和 5 年	5 A 全 上 No. 2353	3	○	

写真 5

このように、天文情報センターアーカイブ室に届けられるものも出てきた。ありがたい。

東京天文台は、昭和 20 年 2 月 8 日未明、本館を失火で消失している。貴重な器械類、観測データ、写真乾板、重要な資料、書類などを焼いてしまった。三鷹国際報時所は離れた場所の独立した機関であったため、このような古い書類も残っていたのであろう。

昭和 20 年の火災というから空襲による戦災と思われる方もいようが、この火災は失火とされている。火災時の宿直だったという方と一緒に仕事をしたこともあった。

国立天文台の皆さんにお願いしたい。古い資料、器械類などを捨てる前に一度、天文情報センター・アーカイブ室にご連絡いただければと思います。

よろしくお願いします。